ISSN 1880-8395

東京学芸大学附属図書館報

ライぶらり

TOKYO GAKUGEI UNIVERSITY LIBRARY NEWS

図書館の力特集

附属図書館長に就任して半年

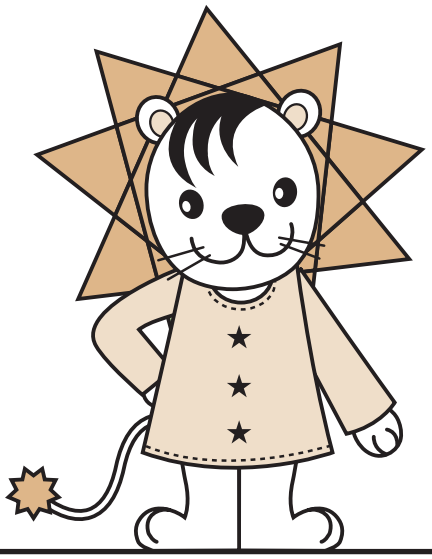
――図書館のあり方と図書館の力について――

出口　利定

平成20年４月から附属図書館長に就任して約半年が経過いたしました。この間、国立大学附属図書館関連の会議をはじめ、本学図書館の運営に関する会議等に参加し、また図書館職員の方々との会話から、改めて「大学図書館」というところの奥深さ、更にいえば「図書館の力」というものを感じています。と同時に、現在、大学図書館が大きな岐路に立たされている緊張感、危機感も感じています。

大学図書館は申すまでも無く、学生、教職員の学習・教育・研究を支援するためのサービス機関です。しかし、昨今のICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）の目覚しい進展、知のインフラとしての図書館の位置付け、学生の自発的学習態度形成のための空間としての図書館…など、多様な要因によってサービスの内容や質を大幅に変えざるを得ない状況にあります。私のように「大学図書館」を懐古趣味的に捉えている者にとっては、「大学図書館」というものの概念を変えなければ、国際規模で生じている現在の変動についていけません。

〈次頁へつづく〉



［特集］図書館の力

◆附属図書館長に就任して半年（出口 利定）　1～2
◆図書館での再発見（大森 直樹）　3～4
◆自著を語る（椿 真智子／上杉 嘉見）　5
◆図書館の力　現代社会で生き抜くために
（高橋隆一郎）　6
◆平成20年度大学図書館職員長期研修　受講報告
（山崎みどり）　7
◆ライブラリー通信　8

Vol.37 [No.3] 2008.10

「ラーニング・コモンズ」という用語をご存知でしょうか？ 今年６月に開催された国立大学図書館協会総会ワークショップにおいて、大阪大学附属図書館、お茶の水女子大学附属図書館からの報告にあった用語です。私にとっては初めて耳にする用語であり、その利点・欠点が報告されました。「ラーニング・コモンズ」の意味としては、ネット世代の学生の学習・生活行動様式にフィットした、次のような施設・設備を備えた図書館内における空間、場所と言ってよいでしょう。

（1）移動可能なパーティションなどによるフレキシブルな空間、
（2）グループ学習室、グループ・ワークステーション、プレゼンテーション室などの共同作業向きの場所、
（3）カフェやラウンジなどの社交的な施設、
（http://current.ndl.go.jp/カレントアウェアネスNo.289 CA1603“インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援／米澤誠”から引用）

図書館は静謐という従来のイメージからは程遠い気がします。しかし、大学図書館の今後のあり方を論ずる時、この「ラーニング・コモンズ」は無視し得ない大きな流れであり、本学でも検討に入りました。こうなると「大学図書館＝ショッピングモール」ではないかと見る向きもありますが、先行するアメリカの大学、特にマサチューセッツ大学アマースト校（Umass・Amherst）の成功例は参考になるようです（http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/wordpress/index.php?m=200712“ハーバード日記・司書が見たアメリカ20／江上敏哲”を参照）。

これからの大学図書館の評価は蔵書数や資料の種類など量的なものだけではなく、どれだけ（どのように）図書館が利用されたかというパフォーマンスの観点が重要視されます。そのためには様々な仕掛けや情報発信が必要です。「図書館を遊びこなそう」という題の連載記事を、金沢工業大学ライブラリーセンター館長・竺覚曉（ちく　かくぎょう）氏が日経新聞に書いています。従来は「使いこなそう」だったように思います。これからの大学図書館のあり方を暗示しているようです。

東京学芸大学が教員養成系大学の基幹大学としての存在を世にアピールするには、本学図書館もそれに相応しい内容・容姿でなければなりません。現在、近い将来の本学図書館のあるべき姿を検討するためのワーキング・グループを立ち上げ、特色ある大学図書館の視察を行っています。学生、教職員の方々からも広く意見を頂きたく希望しています。

（でぐち・としさだ　東京学芸大学附属図書館長）

ISSN 1880-8395

図書館での再発見

大森　直樹

東アジアにおける歴史問題と教育について研究してきたが、博物館から学び、図書館で再発見したことが多い。

私が東京学芸大学の大学院生だった1990年から訪問を重ねているのが、北京の盧溝橋にある中国人民抗日戦争記念館（**写真１・２**）だ。1987年７月に開館した同博物館では、歴史問題の解明に役立つ重要な資料を、以下３つの視点から整理して展示していた（近年リニューアルされた展示内容については未見で近く再訪の予定）。

写真１　中国人民抗日戦争記念館
（2008年10月８日・著者撮影）

①侵略戦争の拡大過程、②侵略戦争の被害、③侵略戦争に対する抵抗、である。この３つの視点は、同博物館の学芸員が積年の研究成果をふまえ設定したものだが、それは同時に、かつて侵略戦争の被害を受けた体験者が歴史問題を捉えるときの視点とも重なる。侵略戦争の拡大過程の分析なしに被害事実の全容は解明されないし、被害事実の全容が解明されなければ責任者による謝罪と賠償も十分なものにならない。歴史問題を解決するための取り組みが、抵抗の歴史と切断されている場合、エネルギーの持続に困難が伴うことが多い。上記３つの視点は、歴史問題を解決するため不可欠の視点とも言える。

写真２　日本による中国侵略概況図
―1874年～ 1930年
（中国人民抗日戦争記念館展示資料）

1874年のいわゆる台湾出兵から1931年「満洲事変」前までの日本による中国侵略の概況を９の史実で示した展示資料。

以上の視点をふまえ、東アジアにおける歴史問題と教育の関係を整理すると、３つの研究課題が見えてくる。第１は、侵略戦争の拡大過程で教育が果たした役割の事実解明。第２は、侵略戦争下の教育に関する被害事実の解明。第３は、侵略戦争に対する抵抗の教育の事実解明である（日本人による抵抗の教育は少数者の取り組みに終始したが、朝鮮人と中国人による抵抗の教育は東アジア各地で休むことなく続けられた）。第１と第２の研究課題は、東アジア教育史の否定的側面に焦点を当てるものだ。第３の研究課題は、東アジア教育史の積極的側面に光を当てるものである。

東京学芸大学附属図書館には、第１の研究課題の解明に役立つ貴重な資料が数多く収蔵されていることを、この間に再発見している。その１つが、明治天皇睦仁の著作物として1890年10月30日に政府から出された「教育に関する勅語」（「教育勅語」）とその関連文献である。その関連文献には、多数の教科書資料も含まれる。「教育勅語」に列挙された11の徳目（徳目数の数え方は研究者により異なる）のうち、最重要とされ、最後尾に置かれた「義勇奉公」の徳目とその直後に続く一文は次のようだった。

「一旦緩急あれは義勇公に奉し以て天壌無窮の皇運を扶翼すへし」

上文の解釈については、衍義書と呼ばれた「教育勅語」の解説書が1939年までに二百数十冊刊行されている。1939年以降に刊行された書籍を加えればさらに膨大な数になる。ここでは、東京学芸大学附属図書館で閲覧が可能な以下３冊の解釈を紹介したい。

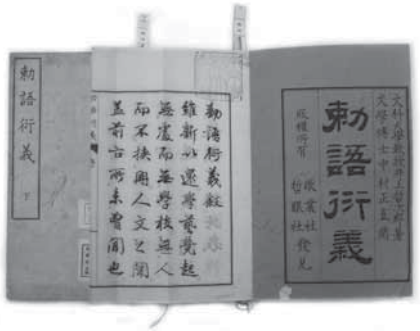


写真３　勅語衍義

井上哲次郎『勅語衍義』（**写真３**）（敬学社・哲眼社、1891年、図書館書庫望月文庫155.3／Me25）は、文部大臣芳川顕正の提議により編纂された「半ば公の」衍義書として、最初期に刊行されたものである。上文に関しては、「徴兵の発令に逢はば、必ず欣然之れに応ずべく、決して逃竄して公事に赴くこと避くべきにあらず」「真正の男子にありては、国家の為めに死するより愉快なることなかるべきなり」とする解釈を示した。

政府が「教育勅語」について「教科書としての解釈を初めて公に」（国民精神文化研究所『教育勅語煥発関係資料集第３巻』1939年、６頁）した衍義書が、文部省『尋常小学修身書教師用巻六』（1911年、『教育勅語煥発関係資料集（図書館書庫155.3／Ko48）第３巻』所収）だ。小学校における道徳教育の教師用指導書である。同書は、「緩急とは危急変乱をいふ。義勇とは義にかなへる勇気なり。「公に奉し」とは皇室国家のために尽すなり。天壌無窮とは天地と共に窮なき義なり。「皇運を扶翼す」とは皇位の御盛運を助け奉ることなり」と逐語解釈した。

写真４　教育勅語謹解

政府が1926年の時点で認定した解釈が記されているのが、梨羽時起編著『教育勅語謹解』（**写真４**）（国民実践会、1926年、文部省認定、図書館書庫望月文庫155.3／Me25）である。同書は、逐語解釈と併せて、上文が実体的な行動に移されたときの具体例についても述べており、「二十七八年の役」（日清戦争1894～95年）、「北清事変」（1900～01年、2万5千人派兵）、「三十七八年の役」（日露戦争1904～05年）、「青島の役」（第１次世界大戦1914～15年）において、「皇軍」が「国光を宇内に宣揚した」ことを挙げた。これら４つの戦争は、すべて朝鮮あるいは中国の地で行われた侵略戦争であり、日本による植民地支配の拡大につながった。

皇室のため、国家のために戦死し、アジアに対する侵略戦争と植民地支配を拡大すること。そうした日本人を育成することが、最も重要な教育目的として定められていた事実を、上の歴史資料から確認出来る。こうした事実の検証が、専門研究者の手で行われるだけではなくて、一人でも多くの学生と教育関係者の手で行われ、歴史事実の直視を基礎にして、東アジアの未来に活かしていくことが期待される。

こうした貴重な歴史資料が、東京学芸大学附属図書館において収集・保存・整理され、利用されてきた。図書館職員による、専門性に裏打ちされた取り組みの継続によるものだ。学術情報課には、図書館職員としての専門試験を経た職員が配置されている。学内には、資料保存についての専門研究者も多い。歴史資料を大切に扱い、後世に伝えてきた地道な取り組みに、改めて敬意を表したい。

（おおもり・なおき　教育実践研究支援センター准教授）

ISSN 1880-8395

『心象風景としての武蔵野・学芸大キャンパス』

椿　真智子

椿　真智子 編・発行
2008年３月

図書館２Ｆ本学刊行
291.365/TSU

まずはじめに、本書は2007年度プロジェクト学習科目「フィールドワークへの誘い：〈まち〉のモザイク―住む・学ぶ・生きる―」応用１にて受講生31名が提出した研究レポートをまとめたものであり、本来の「自著」でないことをお許しいただきたい。気が咎めつつも筆をとった第一の理由は、本書のテーマが、武蔵野や学芸大キャンパスという本学に集う全メンバーが共有する場所・風景であることによる。各レポートには、物理的・客観的風景を「写真」というメディアで切り取ることにより、各人が感覚的・主観的に描いた「心象風景」があらわれている。見慣れたキャンパスや周辺地域の風景に若者は何をどう読み取るのか？それは彼らのアイデンティティや生活スタイルとも深く関わる。風景や場所は、立場・世代を超えた相互理解やコミュニケーションの題材となるだろう。第二の理由は、空気のごとく存在する身近な風景が、実は多様な意味に富んでいることを多くの方に認識していただきたいからである。風景には自然環境・風土や暮らし、歴史・文化が相互に連関し継承されている。日常の風景に新たな意味を発見できたら、世界が違ってみえること請け合いである。

（つばき・まちこ　人文社会科学系准教授）

自著を語る

上杉　嘉見 著
明石書店
2008年２月

図書館１Ｆ開架
371.37/UES

「メディア・リテラシー」は、日本語では一般的に「メディアによる情報を読み解く力」などと翻訳されています。ここで想定されているメディアは、テレビや雑誌、インターネットといった、私たちに日々の出来事や物語を提供する媒体と言ってよいでしょう。

それに対して、カナダの学校でおこなわれているメディア・リテラシー教育は、テレビなどに加えて、一見メディアとは思われないような、ハンバーガーショップやテーマパークまで学習の対象にしています。これらは、人々に生活様式や「夢」の持ち方を伝えるビジネスとして成り立っている点で、テレビ・雑誌等と同じ「メディア」だと考えられているのです。

このようにメディアの範囲を広く捉えるカナダのメディア・リテラシー教育に目を向けると、日本での理解が不十分であることに気づかされます。メディアが伝達しているのは、事実とされる情報だけではありません。それ以上に価値観・世界観が重要な内容なのであって、この見えにくい情報こそ、私たちの物の考え方に強く影響を与えているものとして、積極的に読み解く必要があるのです。

（うえすぎ・よしみ　教員養成カリキュラム開発研究センター講師）

上杉　嘉見

『カナダのメディア・リテラシー教育』

図書館の力

現代社会で生き抜くために

高橋　隆一郎

―― 1　初めに

1980年代のアメリカのある図書館が次のように書かれたポスターを張り出していたことがあるという。「死にたくなっても自殺などしないで一番身近な図書館に援助を求めに来てください。図書館には入門書や文献目録があり、皆さんの調べもののお手伝いをする司書がいます」。自殺を考えざるを得ない状況を解決するために必要な情報を図書館で入手する情景を表しているこのポスターは、自殺者が年に30,000人以上になる日本でも注目すべき話である。

―― 2　社会生活と情報

現代社会で、私たち自身や自分の家族・恋人などの身には様々な問題や困難が起こり、それらの問題を打開しながら生きようとしている。社会で生きていくために様々な対策を考えるとき、それらに関して「学ぶこと」―現代社会にあふれている様々な情報を獲得し、活用したうえで新たな知識を生み出す能力が必要とされている。

―― 3　「図書館の力」とは何か

ところで、「図書館の力」とは何か。最初の段落で「死にたくなっても自殺しないで一番身近な図書館に援助を求めに来てください」というポスターを紹介した。そのポスターが語るように、「図書館の力」を形作る一つは、出版されている資料の中から選ばれ、図書館の棚に並んでいる資料の数々である。また、利用者の相談にのり、利用者が必要としている情報が何なのかを読み解き、その情報の利用を手伝う司書の参考業務である。さらに自分の図書館の資料だけで用が足りなければ取り寄せてまで提供するという相互協力のシステムである。利用者の求める資料を利用する手伝いをすることで利用者を支えようとする力、その全体が「図書館の力」である。

―― 4　「図書館の力」の活用

かつて浦安市立図書館で図書館長をなさった常世田良さんは、「図書館は本を読んだり貸し出したりするところではなく、人間が幸せに暮らすための知識を提供する場所です」と述べている。この発言は、最初の「自殺をやめて身近な図書館に来て」のポスターと通じるところがある。

現代社会で生きていくためには、いろいろな場面に遭遇しなければならないし、それを乗り越えるために、私たちにはいろいろな情報を使いこなしていく力が求められているのだということを今まで述べてきた。図書館にたくさん置いてある本には、様々な情報が書かれており、自らの抱えている問題に役に立つことも多いであろう。インターネットが使える図書館も増えてきており、資料やインターネットに書かれている情報は法律上・医療上の問題に直面する人などにとっても有用であるし、また、研究や学習、娯楽等のための情報にも富んでいる。

必要な資料がすぐに手に入らない場合でも、リクエスト制度で購入を依頼できたり、他の図書館から資料を取り寄せできたりする。それはまるで間近な図書館が水道の蛇口で、図書館のネットワークが巨大な水源地や水道であるかのようなものである。何か情報を探しているのであれば図書館を訪ねて、わからないことは司書に聞くことが肝要なのである。

―― 5　そして最後に

図書館とは、情報を求める利用者の織りなす人生模様と資料を制作した著者たちの人生模様、そしてそれらを仲介する司書たちの人生模様の交差する場である。私自身も様々な利用者が図書館で様々な情報に出会うお手伝いをしてきた。たとえば、知り合いが引きこもりになってしまったので力になろうとしている人には、WEBCATなどの資料検索の道具を教えたり、引きこもりに関係する資料の棚まで案内したりした。今度は皆さん一人一人が図書館を使いこなして社会で生き抜いていく番である。「図書館を使いこなすことでそれぞれの人生に必要な情報は得やすくなり、社会を生き抜くことがたやすくなる」。このことをぜひ心にとめていただき、図書館を有効に活用していただきたい。

（たかはし・りゅういちろう
学術情報課利用者支援係長）

ISSN 1880-8395

平成20年度 大学図書館職員長期研修

受 講 報 告

山崎　みどり

平成20年７月７日～18日に筑波大学を会場として開催された「平成20年度大学図書館職員長期研修」を受講しましたので報告します。

本研修の目的は、「全国の国立大学図書館等の中堅職員に対し、学術情報に関する最新の知識を教授するとともに、図書館経営・情報サービスの在り方について再教育を行い、職員の資質とマネジメント・企画等の能力の向上を図ることにより、大学図書館等の情報提供サービス体制を充実させること」と実施要項にあります。受講資格としては原則、係長クラスで年齢35歳以上45歳以下である者（いわゆるAround 40 世代ですね。）等となっており、２週間の本研修には全国から35名が参加しました。本研修には歴史があり、今年で40回目を迎えています。現在、当館に在職している係長以上の図書系職員はこれまでに全員受講しています。

さて内容は、その時々の図書館を取り巻く状況が反映されたものとなっています。今回の講義では、「オープンアクセスと機関リポジトリ」「ラーニング・コモンズ」などがキーワードとなっていました。講師陣も多彩で、筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教員や、大学図書館職員のほか、大学の理事（副学長）、図書館長、公共図書館職員、Google社マネージャー等の方々がお話しくださいました。

研修内容は講義を聴くだけでなく、問題発見・解決演習（８コマ計12時間）や、班別討議・発表（４コマ計６時間）の時間も設けられていました。演習では、コンサルティング会社から派遣されたプロ講師による、問題発見と解決のスキルに関する実習を伴ったレクチャーがありました。この内容は、当館所蔵資料である『世界一やさしい問題解決の授業』（所在: 図書館１Ｆ開架、請求記号: 141.5 / WAT）などでも紹介されています。

ここで感じたのは、最新の知識を吸収するのはもちろん大事なことですが、様々な問題に応用できる手法を身に付けておくことも重要だということです。またこのことを図書館のサービスに当てはめて考えてみると、資料や情報そのものを提供することも不可欠ながら、資料や情報の探し方を、講習会や広報資料等を通して利用者のみなさんに伝えていくことも大きな位置を占めるのだと改めて思います。

このような研修を受講した図書館職員が数多く存在することは、その大学図書館の力を目に見えないところで底上げしているのではないかと思います。

最後に、本研修を受講した先輩職員も口々言っていることですが、長期研修で同期となった人達とは研修後もずっと交流が続くそうです。研修中も多くの情報交換ができたことは大変貴重でしたが、今後も全国の大学図書館職員間でのネットワークを大切にし、業務にも役立てていきたいと思います。

（やまざき・みどり
学術情報課雑誌情報係長）

ライブラリー通信

◎ 附属小金井中学校生徒の図書館職業体験記

平成20年８月４・５日、６・７日、26・27日の各２日間ずつ、附属小金井中学校から２年生９人が職業体験に来館しました。２日間で附属図書館のすべての係を体験して回りました。以下は全員（50音順）の感想の抜粋です。

1 本の装備（カバーをはずし、バーコードとラベルを貼る）という、一見しただけでは地味としかいえない作業が一番面白かった。
（秋山永莉香さん）

2 往来物など古い資料を見せていただき、とても面白かったし、世界に一つしかないものもあると聞いて、次の世代へ伝えていきたいと思った。
（石毛　萌さん）

3 図書館というと「本を扱う所」というイメージしかなかった。しかし今、職業体験を終えて、私の中の図書館のイメージは書き換えられた。「図書館は情報を扱う所」だと。
（井上さつきさん）

4 図書館の仕事は、利用者が快適に利用できる場所にするという大きな責任を担っているのだなと思った。裏（注：カウンター業務以外の事務作業ですね）で頑張っているのが本当に大事なのだと思い知らされた。（注：図書館）
（梶　桃夏さん）

5 地下には多くの歴史を刻んだ本があり、大切に保護され伝わり続けています。自ら体験して、一番重要な仕事と言うのは「歴史とともに本を伝えて行く事」だという事がわかりました。
（近藤　聡美さん）

6 図書館の仕事は、多くの人がよりよく本と親しめるための仕事ばかりで、図書館で働く人が本当に本が好きということが伝わってきて、より一層図書館が好きになった。
（坪内　哲朗さん）

7 すべての仕事を知れば知るほど、どの仕事も必要だということがわかるし、図書館はたくさんの利用者のための仕事があることがわかりました。
（林　莉世さん）

8 想像していたことより楽しくて、ずっとやっていたいなと思った。司書になってみたいという気持ちが大きくなった気がした。
（平沼　範奈さん）

9 図書館の作業ってもっと手作業ばかりだと思ったが、私達が見ていない所で色々なことをしていてハイテクだと思った。
（松倉　彩華さん）

［編集発行］東京学芸大学附属図書館
〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1　TEL 042-329-7223 / FAX 042-329-7226
●URL http://library.u-gakugei.ac.jp/　●携帯版URL http://library.u-gakugei.ac.jp/i/

［表紙・キャラクターデザイン］美術・書道講座　正木賢一